IS インフィニット・ストラトス　Gを操る者

フレイムバースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　インフィニット・ストラトス　　Ｇを操る者

【Ｎコード】
Ｎ９９６１Ｘ

【作者名】
フレイムバースト

【あらすじ】
最高神、ゼウスに命じられ下界へとおりた主人公の神はそこで何を見るのか……
更新がかなり遅いですが、頑張って書いていきます

プロローグ

「……」

はじめまして、神様です。

今は最高神のゼウス様にお仕事を依頼されたので僕はゼウス様の部屋で、一対一でゼウス様とお話しています

「緊張しすぎだ。肩の力を抜きな」

「は、はい。お、お気遣いありがとうございます」

「直りそうにねえな……。まあいい、今日、お前を呼び出したのはお前に頼み事があるからだ」

この現代的な口調のお方が最高神のゼウス様だ

「は、はい。そ、その頼み事とは、な、なんなんでしょうか？」

「インフィニット・ストラトスという兵器がある世界におりて、その世界の出来事を俺に報告してほしい」

「はっはい！了解いたしました！」

「その世界に適応するためのアイテムもやる。……これだ」

ゼウス様が引き出しから何か、ネックレスのような物を出されました

「こ、これは……」

「この前部下に調べさせたガンダムの世界の兵器を、インフィニット・ストラトス並みに小さくしてその機能も付け足した。これをお前にくれてやる」

「はっ！ありがたき幸せ！この力を使って、必ずやゼウス様のお役にたってみせます！」

「なら、行け！」

「はっ！」

僕はゼウス様の部屋から出ていき、すぐそこにある扉に向かった。

その扉は天界と下界をつなぐ扉で、よく他の神が下界に降りるときに使われる

「……さっ！行きますか！」

僕はその扉をくぐり、下界へと向かった

下界でまず感じたのは頭への衝撃でした（前書き）

第二話です

下界でまず感じたのは頭への衝撃でした

ゴンッ！

「いたあっ！」

下界におりた瞬間、僕は地面に頭を打っちゃいました

「……ふえ……いたいよお……」

ゼウス様から言われてたけど僕は今、実質的にただの人の状態だからすっごく痛い……

頭にヒビが入ってませんようにっと！

「そこの貴様！何をしている！」

突然、大きな声が聞こえました

「ひゃいっ！？」

僕はびっくりして、変な声を出してしまいました

すぐ後に黒いスーツを着た、女の人がやって来た

「貴様、何者だ。名を名乗れ」

「あっ……えーっと……」

どうしよう！

この人女の人なのにすっごく怖そうだよう…！

じゃなくて！

名前！どう名乗ったらいいんだろう！？

いま、祐希っていう名前が思いついたけど名字……そうだ！神谷でいいや

「……神谷祐希と言います」

「神谷祐希……わかった。神谷、ここで何をしていた」

「……え……ちょっと……道に迷っちゃって……アハハ……」

バシン！

「いたあい！」

「笑っている場合か馬鹿者」

「……ごめんなさい」

「それより、気になる事がある。お前の首にあるネックレスのような物はなんだ。一見するとＩＳの待機状態にも見えなくもないが……」

「……？ああ、これですね」

「調べさせてもらうがいいな？」

「は、はい…どうぞ」

僕はネックレスをその人に渡した

「少しの間、預からせてもらう。あとお前が何者かまだわからないのでこれが解析し終わるまで監視をさせてもらうが構わないな？」

「はい」

「ならついてこい」

「わかりました」

僕はその女の人についていきながらある質問をしました

「あの～……」

「なんだ」

「ここってどこなんですか？」

「……本当に道に迷っていたのなら仕方がないか……ここはＩＳ学園だ」

「インフィニット・ストラトスの学校ですか……」

「その通りだ」

「聞いてはいましたけど……本当に女性しかいないんですね」
僕はキョロキョロと回りを見ながらそう言った。
時々微笑んであげたりしたら鼻血を出して倒れた女の子もいたけどね
「いいや、今年はイレギュラーが入学してくる、仮にこのネックレスがＩＳ立った場合、お前もそのイレギュラーとして、このＩＳ学園に入学してもらう」
「えっ？何でですか！？」
「ＩＳを展開出来ない男がＩＳを持っているはずはないだろう？」
「確かに……そうですね」
それを聞いて僕は納得しました
「ついたぞ。しばらくここで待機してもらう」
「え〝……」
僕の目の前あったのは錆び付いた扉でした
「ここ……ですか？」
「扉は錆びているが部屋の中はまだマシだ」
「は、はあ」

「納得したのなら入れ」

「……はい（泣）」

僕は嫌々その部屋に入りました

部屋の中にはダンボールが三個、積まれていてかなり殺風景な感じでした

「解析には少し時間がかかる。それまでそのダンボールの中にあるもので暇を潰せ。その中にあるのは生徒から没収した物だからある程度暇は潰すことが出来るはずだ」

「あ、ありがとう……ございます……？」

「何故疑問形なのかは聞かないでおこう。しばらくしたらまた来る」

「……わかりました」

ギィィィ……ガシャン！

「ふう……ま、ダンボールの中を漁ってみるか」

ダンボールを漁ってみると中には漫画がいっぱい入っていて、漁っていくと一番下に僕の興味をそそるものがあった

「……なんでこんなものがあるのさ……」

そこにあったのはエレクトーンでご丁寧にヘッドホンが繋がっていた

どうやってこんなものを運び入れたのかはこの際気にしないでおこう
近くに電源があったのでそれにプラグを差し込んで僕はエレクトーンの電源を押した
「……よかった。まだ動くんだ」
僕は耳にヘッドホンをして、音楽を弾き始めた

―――――――――――――――――――――――――――――

「ふう……」
音楽を弾き終わったあと僕はエレクトーンを片付けてダンボールを並べて、横になっていた
「まだかなあ……」
僕は起き上がったあとまたダンボールを探ったりして暇を潰していたけどさすがに一人だと寂しくなってきた
ゴンゴン！
「私だ」

さっきの女の人が戻ってきたみたいだ！

「あ、はーい！」

僕は扉をあけて、すぐに部屋から出ていった

「調べた結果これは案の定、ＩＳだった。」

「では……僕はＩＳ学園の生徒になるんですね」

「嫌なら実験生物（モルモット）でもいいぞ？」

「いえ、僕はこの年で精神を腐らせる気はありません。ですから喜んで受け入れさせてもらいます」

「そうか、なら今日から寮で過ごせ」

「ありがとうございます」

こうして僕はＩＳ学園に入学する事が決まった

下界でまず感じたのは頭への衝撃でした（後書き）

無理矢理終わらせました

出してほしいＭＳ……とはいってもガンダム系ばっかりですがあったら感想に書きこんでください

設定（前書き）

とりあえず設定

設定

設定！

名前　神谷祐希

性別　男（という事になっているのだが、元々性別がない）

容姿　かわいい系

見た目はガンダムＳＥＥＤのニコル・アマルフィ

専用機　バトル・メモリーズ

祐希はこれをメモリーズと呼んでいる

趣味　エレクトーンを弾くこと　散歩

体つき　細身。顔が顔なので女装をしたら女性にしか見えない

備考

最高神ゼウスに命じられ下界にやって来た神

名前は人間界におりた神が千冬にとっさに名乗った名前。

顔が女性的なので、他のクラスメイトと一緒にいると、女の子の仲良しグループにしか見えない

神としての能力はかなり制限されていて、実質的にはただの人の状

態である

若干ドジなところがあるがそれがクラスでの人気を高めている要因になっている

専用機　　バトル・メモリーズ

祐希の専用機。

ガンダムシリーズの全ての機体になることが出来る

祐希は好んで、エールストライクガンダムを使用するが緊急事態に陥ると最強クラスの機体を使用する

前述のとおり、ガンダム以外の機体にもなれるがＭＳの組み合わせによってはファンネルを大量搭載した機体やビームサーベルを大量に装備した機体にもなれる

ワンオフアビリティー　　現段階では不明

入学初日。僕は女の子に間違われた。（前書き）

久しぶりの更新。

にしてもガンダムシリーズのＭＳＶの機体ってかっこいいの多いですよね

ガンバレルダガーとか斬新だし

入学初日。僕は女の子に間違われた。

（……うわ～。これはキツいなあ……）

こんにちは。神谷祐希です。

僕はあの後、入学することになって、同じ男子がいる1年1組のクラスに入りました。

だけど……

（……ここまで女の子に囲まれてると本当にきついや……ああ、天界に帰りたい）

目を擦りながら、僕は心の中でそう思った

今は自己紹介タイムで、前でもう一人のイレギュラーが立って自己紹介していた

「織斑一夏です」

織斑？　ならあの織斑先生の関係者かな？

「……」

少しの沈黙。

「……以上です」

ガタタッ！

クラスのみんな（僕も含む）がずっこけた

その織斑一夏の背後にに迫る影……

スパァン！

「げぇっ、関羽！？」

スパァン！

わ～出席簿アタック二発目が直撃した～

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

その出席簿アタックを繰り出したのは織斑先生だ

「あ、織斑先生。もう会議は終われたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いぇっ。副担任ですから、これくらいはしないと…」

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞

け。いいな」

それって結局織斑先生の言うことには従わなくてはならないんだな。

うん、脅迫じみてる。

「神谷、失礼な事を考えるな」

「あっ、はい！すいません！」

「失礼な事を考えた罰だ。ここで自己紹介しろ」

「はい」

僕は立ち上がり、自己紹介を始めた

「はじめまして、神谷祐希です。女の子みたいな顔をしていますが、ちゃんとした男子です。趣味は多趣味なので後で聞きに来てください。あと専用機持ちです。これから一年間よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げて、僕は自己紹介を終える

「き……」

「え？「「「「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」」」うわっ！」

「かわいい！かわいいよあの子！」

「ほっぺた柔らかそう！いや体中が柔らかそう！骨まで柔らかそう！」

「ハァハァ……男の娘で……じゅるり」

「いっ！？」

僕は身震いしてその言葉に反応してしまった

パンパン！

「うるさいぞ！」

ああ！織斑先生の助け船だ！ありがたい！

織斑先生の鶴の一声で僕は変態の魔の手から逃れられた

――――――――――――――――――――――――

今は授業の間の休憩時間だ。さっきの授業でいろいろあって……（織斑君が必読と書かれてたＩＳの本を捨てちゃったとか）それで織斑君は今、頭からなぜか変な煙が出して机に顔を当てている

「ねえ、織斑一夏君」

僕はその織斑君に話しかけた

「ん～？あ……あんたは確か……」

「神谷祐希だよ。祐希って呼んで」

「お、おう。よろしくな、祐希。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれていいぞ」

「うん。こちらこそよろしくね、一夏」

「おう！」

どうやら友達になれたみたいだ。よかった。

ある程度仲良くした所で、僕はさっきの一夏の失態を問い詰めた

「ところで一夏、必読って書いてあったやつ捨てたの？」

「……ま、まあ……馬鹿馬鹿しいことに間違えて捨てちまった」

「仕方ないや。僕のを貸してあげる……いやもうあげちゃうからそれで勉強して。僕は肉体言語を伴う学習で覚えたから」

「お、おう……。（千冬姉に教えてもらったのか……名前をだされなくてもわかる俺を誉めたい）」

「一夏、はいこれ。参考書」

「お、おう。あ、ありがとな」

一夏の顔が真っ青に染まりつつある。

たぶんやりたくないんだろう

「一夏、わかってると思うけど」

「なんだ？」

「ちゃんと、べ・ん・きょ・う、してね！」

確りと釘をさしておいた

入試って受けたっけ？（前書き）

タイトルは……まあ、話の途中で思ったことを書いただけです

入試って受けたっけ？

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」「なんですか？」

一夏に参考書を渡したすぐあと、僕達の所に金髪で縦ロールのいかにもお嬢様チックな人がやって来た

「訊いてます？　お返事は？」

「したはずだけど？」

「あ、ああ。訊いてるけど…どういう用件だ？」

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

……なんだろこの人、偉そうに回りを見下して。

ほんと、うっとうしいなあ

「悪いな、俺。君の事知らないし」

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

うわーナルシストがここにいる～。

ナルシストな人僕は苦手なんだけどなぁ〜

「あ、質問いいか？」

一夏が

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、なに？」

スパァン！！

僕は履いていたスリッパを脱ぎ、それで一夏の頭をはたいた

「一夏、言葉から連想して」

「なにも叩く必要はねーだろ……まあ連想してみて俗に言うエリートか？」

「そう！　エリートなのですわ！」

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

……そんなので奇跡なんて言ったらこの世界、奇跡で溢れかえって

るよ

「そうか、それはラッキーだ」

「ふうん、そうなんだ」

「……馬鹿にしていますの？」

「少なくとも僕はね」

「あっ、あなたねぇ……大体、あなた方はＩＳについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。あなた達二人だけが唯一男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「悪いけど、僕は参考書の内容は暗記しているから。つまらない喧嘩を売るの、やめてよね、貴女が僕とけん「俺に何か期待されても困るんだが……」わけない……一夏、邪魔しないで」

見事にネタが一夏に邪魔された

「ん？邪魔したのなら悪かったな、祐希」

一夏が詫びたあとまたセシリアさんが口を開いた

「まあ、わたくしは入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから？　ＩＳについて分からないところがあれば、泣いて頼まれたら教えてあげてもよくってよ？」

「まあ、そうだな。でも入試ってあれか？　ＩＳ動かして戦うやつ

？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あ、それ俺も倒したぞ教官」

……？入試って僕受けたっけ？

織斑先生から制服を渡されたあとこの学園の部屋（という名の物置。詳しくは二話参照）でぐうたらしてたからなあ……

「……僕は～ちょっと尋問を受けてたからなあ……この専用機を誰からもらったとか」

テキトーに誤魔化しておこう

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子では貴女だけというオチじゃないですか？」

「だよな」

「つ、つまり、わたくしだけではないと…？」

「いや、知らないけど」

さっさと理解しようよ、セシリアさん

「あなた！　あなたも教官を倒したっていうの！？」

「うん、まあ、たぶん」

たぶん？

「一夏、たぶんってどういうこ「多分！？　多分ってどういう意味かしら！？」」

セシリアさんが一夏に詰め寄る

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ――――」

キーンコーンカーンコーン♪

チャイムがなった！

もうすぐ織斑先生が来るぞっ！

「タイムアップだ、オルコット」

もう来てた！　三秒以内に席につかないと叩かれるっ！

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する――ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

……一夏、たぶん全然わかってないな。

はぁ、これじゃダメダメです。（某青いコスモスの人風に）

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦では、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間は変更が無いからそのつもりで」

まあ……みんな物珍しさで僕達を推薦するんだろうね。容易に予想ができるよ

「はい！　織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「私は神谷くんを推薦します！」

「あ、それもいいわね。はい！　私も神谷君くんを推薦します！」

ほらね？僕の思った通りになった

「では候補者は織斑一夏と神谷祐希……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」「お、俺！？」

あ、一夏が立ち上がった。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他には居ないのか？　いないなら織斑か玖蘭、どちらかになるが」

バンッ！

「待ってください！　納得がいきませんわ！」
一夏がなにか言おうとしたのを遮って、セシリアさんが机をたたきながら立ち上がった。
どうせこの人のことだ、つまらない事ばかり言うんだろな
「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」
……っ、イラって来るんだけど……！
「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこのような島国までＩＳの修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」
このような島国？　イギリスも島国でしょ？　人のこと言えないくせに
「いいですか！？　クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」
あっそう。じゃあ勝手にやっててよ。
「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で――――」
ブチッ！

言ってはならないことを言ったね。あの女

「イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「文化としても後進的？　ハハハ、冗談もいい加減にしてよ。イギリスも古いだけじゃないですか。それとも？貴方はイギリスの方が日本より遥かに上位だとでも言いたいのですか？あと、イギリスも島国でしょ？」

思っていたことを一気にセシリアさんにぶつける

「あっ、あっ、あなたねえ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「……ここまで言われてもまだ懲りないようですね。貴女が先に日本を侮辱したのではないですか？」

「っ———決闘ですわ！」

「いいですよ。ね、一夏」

「おう。四の五の言うより分かりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い———いえ、奴隷にしますわよ」

「ごめんね、もし奴隷になったとしても反乱を起こすから」

「そう？　何にせよちょうどいいですわ。イギリスの代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会

ですわね！」

「んじゃ、ハンデはどのくらい付ける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「違う。俺と祐希がどのくらいハンデをつければ良いのか、だ」

クラスから、ドッと爆笑が起こった。

……僕達は馬鹿にされているな

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「二人は確かにＩＳを使えるかも知れないけど、それは言いすぎよ」

「……みんな、なんで今の世界で女性が強いか知ってる？」

「それはＩＳを使えるからでしょ？あー笑いすぎてお腹イタイ」

クラスの中の誰かがそう言った

「ならＩＳを使える僕達もそれに当てはまらないかな？」

「あ……」

それを聞いたとたんその誰かさんはそんな声をもらした

「そ、それでもオルコットさんは代表候補生なんだよ？」

また女子のうちの誰かがそう言った。

「なら、お互いにハンデは無し。それで良いよね？一夏も」

「あ、ああ。それでいい」

「私もそれで構いませんわ」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と玖蘭、オルコットは各自準備をしておくように。それでは授業を始める」

……セシリアさん。僕がただのＩＳを使ってくると思わないでよ

ギャフンと言わせてあげる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9961x/

IS インフィニット・ストラトス Ｇを操る者

2011年11月24日00時52分発行